

## 2025 年沖繩地区大学生友好訪中団 報告書

2025 年沖繩地区大学生友好訪中団の副団長として訪中しましたので、報告いたします。

### 1. 日程

2025 年 9 月 6 日（土）～9 月 10 日（水）

### 2. 場所

北京大学語言大学・応用中文学院（100083 中国北京市海淀区学院路 15 号）

### 3. 団長・副団長

王志英（団長、沖繩大学）、宮里智子（副団長、沖繩県立看護大学）

### 4. 参加学生

沖繩県立看護大学 2 名、名桜大学 2 名、沖繩国際大学 2 名、琉球大学 6 名、  
沖繩大学 6 名

### 5. 宿泊先

北京語源大学 学生寮

### 6. 日程

別紙参照

### 7. プログラム

#### 1) 1 日目（9 月 7 日）

##### (1) 開会式 8 時 30 分～9 時

周鑫 学部長より挨拶があり、その後、大学についての説明が行われた。

北京語言大学は、中国で唯一の、外国人学生に対する中国語・中国文化教育を主な任務とする大学である。年間に約 10,000 人の学部生、大学院生、語学研修プログラムの外国人学生を受け入れており、外国人学生の国や地域は、およそ 200 におよぶとのことである。中国語を専攻する中国人の学生も在籍している。

##### (2) キャンパス見学 9 時～9 時 30 分

広大な敷地に、校舎、図書館、食堂、テニスコートやバスケットコートなどが設置されており、通路の両端には留学生の国旗が掲げられている。敷地外には、道路を挟んだ場所に学生寮がある。

キャンパスを歩き来する学生は多国籍であり、夜になるとバレーボールやテニスなどを楽しむ様子もみられ、活気あふれ、自由な雰囲気のある大学である。また、地域住民が大学の敷地内を歩き来しており、早朝は太極拳、夜は卓球や

テニスなどを楽しんでおり、地域に密着した大学という印象を受けた。

(3) 校史館見学 10時～11時

校史館とは、大学内に設置された、大学の歴史に関連する資料が展示された施設である。大学は1950年に精華大学の中国語クラスとして設置され、その語、大学になったこと、当初は留学生だけを受け入れていたが、現在は、中国人学生も受け入れていることなど、大学の歴史にふれることができた。

(4) 天安門広場の見学 13時30分～

観光客が多く、入場に時間がかかることから、天安門広場の見学を断念した。

(5) 故宮博物院の見学 15時30分頃

故宮博物館は、以前は紫禁城と言われており、中国の皇帝の政治を司る場であり生活の場でもあり、皇帝の権威を示す象徴であることなどが分かった。

2) 2日目 (9月8日)

(1) 授業 8時30分～12時10分

8:30- 9:15 中国語クラス

9:25-10:10 中国語クラス

10:30-11:15 書道

11:25-12:10 水墨画

(2) 頤和園の見学 14時～17時

頤和園は、明の時代の皇帝と皇太后の庭であり、避暑のために過ごした場所である。しかし、西太后が清の皇帝を幽閉した場所でもあり、常に政治と切り離せない場所でもあった。

3) 3日目 (9月9日)

(1) 万里の長城見学 8:30～16:00

(2) オリンピック会場 通称鳥の巣広場見学 17:00～18:15

(3) 夕食 北京ダックなど

8. 中国の文化体験

1) 個人認証の厳しさ

中国版LINEでWeChatというアプリがあるが、IDをつくるためにWeChatのIDを持っている人に承認してもらう必要があること、学生寮のチェックインの際に、本人確認のために受付の人のパスポートを渡すように求められ、そのパスポートはフロントで

預かると言われ、一晩戻ってこなかった。外国人研修生などについては警察に届ける必要があるということで、パスポートのチェックを受け、写真を撮られてからパスポートが返却された。また、銀行で両替の手続きをしたところ、書類にマイナンバーカードの番号を書くように求められた。マイナンバーカードを持ち合わせていなかったため、王先生が手続きをしてくださったが、本人確認はパスポートで十分だと思われるが、なぜ日本のマイナンバーカードの番号が必要なのか疑問に思った。

## 2) 食文化と飲料水事情

お粥や蒸しパン、水餃子などが一般的な料理である。豆乳を飲む習慣もある。日本人のように、食事中にお茶や水を飲む習慣はなく、食事中の水分はスープで摂ることが一般的である。また、水道水を直接飲むことはできず、沸騰させてから飲んでいるとのことで、学生寮にも高温のお湯を共有する機械が備え付けられていた。中国人は自分自身の水筒に水やお茶を入れて持ち歩いている。スーパーでも12本入りの水のペットボトルのパックが山積みで売られており、ホテルでは一日2本程度のペットボトルが配られるようである。我々が乗車した観光バスも、車内でペットボトルが配給された。飲料水はとても貴重であることが分かるが、大量のペットボトルがゴミとしてでることが社会問題となっている。

## 3) トイレ事情

中国は水洗トイレであり、便器などは比較的きれいであったが、どんな場所でも下水道の匂いがしていた。配水管が細く、詰まりやすいということから、下水道は整備されていないように思われた。また、配水管の詰まりを防ぐために、使用したトイレトーパーはトイレに流さず、備え付けのゴミ箱に入れるというルールがあった。最初は抵抗感があったが、そのうち慣れた。

## 4) 交通事情

中国の車道は右側通行であり、車は左ハンドルである。人よりも車が優先であり、青信号で横断歩道を渡っているときも、右折や左折の車やバイクが突っ込んできて、とても危険である。また、歩道をバイクが勢いよく走っており、人がいると容赦なくクラクションを鳴らす。道路を歩くときは、常に車やバイクを気にしている必要がある。

## 5) 国営の強みと怖さ

故宮博物館や万里の長城への入場は、あらかじめ大学が予約してくれていたが、入場

チケットをもらうのではなく、パスポートの提示を求められた。また、大学への出入りの際にも、研修生用カードの提示を求められた。中国人は、個人カードの提示を求められる。中国は全て国営であり国が管理しているため、個人の行動に関する情報は、すべて国が集約していることが分かった。パスポートや個人カードひとつで施設の利用は可能となり面倒な手続きは不要であるが、個人の行動が全て国に把握されていることとなるため、常に国に監視されているという怖さを感じた。

また、万里の長城のまわりに栗の木が生えており、沢山の栗が実をつけていた。王志英先生は、その栗の実をとろうとしていたため、「そんなことをしたら怒られますよ」と私が声をかけたところ、「中国では怒られません。国のものは全て皆のものです」との返事であった。考え方の違いを実感した。

## 9. 所感

今回の研修は、国や地域には特有の文化があり、人はその文化のなかで生活していることを気づかせてくれる研修であったことから、異文化理解において意義があると思う。本学の学生は、看護の対象理解において、この研修での学びが活かされるのではないかと考える。

以上



開会式  
前列の中央：学部長の周鑫先生



大学の正面  
本学の学生 2 名



中国語の授業



水墨画の授業



書道の授業



大学の風景 夜



大学の風景



国際学生の寮